４　　忠平と鬼　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　文法　未然形接続の助動詞①

読解　 主題をつかむ

新傾向 複数資料の相違点をつかむ

この殿、うけたまはらせたまひて、おこなひに陣座ざまにおはします道に、ののうしろのほど通らⓐせたまふに、もののけはひして、御のいしづきをとらへたりければ、いとあやしくてさぐらせたまふに、毛はむくむくとおひたる手の、ながくて刀の刃のやうなるに、鬼なりけりと、いとおそろしくおぼえけれど、臆したるさま見えⓑじ、と①念ぜさせたまひて、「おほやけのうけたまはりて、に㋐まゐる人とらふるは何者ぞ。②ゆるさずは、あしかりなむ」とて、御太刀をひき抜きて、かれが手をとらへさせたまへりければ、まどひてうち放ちてこそ、③のざまに㋑まかりにけれ。

* 語注

この殿＝のこと。

陣座＝公卿が議定をする場。

南殿＝。儀式や公事を行う場。

御帳＝ここでは天皇の御座所。

いしづき＝刀剣のの先を金物で飾った部分。

定＝公事の評定。

丑寅＝鬼門。鬼が出入りする方角とされる。

隅ざま＝遠くの方。

【原文】

この殿、宣旨うけたまはらせたまひて、おこなひに陣座ざまにおはします道に、南殿の御帳のうしろのほど通らせたまふに、もののけはひして、御太刀のいしづきをとらへたりければ、いとあやしくてさぐらせたまふに、毛はむくむくとおひたる手の、爪ながくて刀の刃のやうなるに、鬼なりけりと、いとおそろしくおぼえけれど、臆したるさま見えじ、と念ぜさせたまひて、「おほやけの勅宣うけたまはりて、定にまゐる人とらふるは何者ぞ。ゆるさずは、あしかりなむ」とて、御太刀をひき抜きて、かれが手をとらへさせたまへりければ、まどひてうち放ちてこそ、丑寅の隅ざまにまかりにけれ。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

藤原忠平が、〔　　　〕をお受けして執り行うために〔　　　〕あたりを通ると、〔　　〕に出会った。太刀を抜き、鬼の〔　　〕を捕まえたところ、逃げ去った。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ（終止形でよい）。〈４点×２〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ・ⓑの文法的意味と活用形を答えよ。〈３点×２〉

ⓐ〔　　　　〕〔　　　　〕形　ⓑ〔　　　　〕〔　　　　〕形

問四　チェック問題　［未然形接続の助動詞①］

⑴次の助動詞の活用表を完成させよ。〈１点〉

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| ず | |  |
|  |  | 未然形 |
|  |  | 連用形 |
|  |  | 終止形 |
|  |  | 連体形 |
|  |  | 已然形 |
|  |  | 命令形 |
|  | | 接続 |

　⑵次の傍線部の助動詞の文法的意味を答えよ。〈１点×３〉

１　世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし （伊勢物語）

２　人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはむこと、… （徒然草）

３　言ひつること、いま一かへり我に言ひて聞かせよ。　　 （更級日記）

１〔　　　　　　　　　　〕　２〔　　　　　　　　　　〕３〔　　　　　　　　　　〕

問五　傍線部①は「この殿」のどのような様子を表したものか。三十字以内で答えよ。〈10点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　傍線部②の解釈として最も適当なものを選べ。〈７点〉

ア　お前が犯した重い罪を、決して許すことはできない。

イ　お前を捕らえたことは、私の名誉にとってはよくないことだ。

ウ　手を放さなければ、お前にとって不都合なことになるぞ。

エ　お前が罪を認めなければ、さらに痛い目にあわせてやろう。

　〔　　　〕

問七　傍線部③は方角を表しているが、どの方角か。正しいものを一つ選べ。〈３点〉

ア　南西　　イ　北東

ウ　南東　　エ　北西

　〔　　　〕

問八 本文はどのような主題で書かれたものか。最も適当なものを選べ。〈６点〉

ア　鬼への恐怖に打ち勝った忠平の心の強さ。

イ　鬼の心にも響き伝わる忠平の正義感。

ウ　天皇の名誉を守りぬいた忠平の忠誠心。

エ　天皇の警備を全うした忠平の責任感。

　〔　　　〕

問九　本文における忠平と鬼の逸話は後年、江戸時代の浮世絵師・月岡による『和漢百物語』（一八六五年）の中で描かれている。次の【絵】は『和漢百物語』の忠平（貞信公）を描いた絵であり、【文章】はこの絵の右上に記載されている、戯作者・隅田（墨塘了古）による解説である。これらをもとに、本文と【絵】および【文章】を比較した説明として適当でないものを一つ選べ。〈６点〉

【絵】



（国立国会図書館デジタルコレクションより）

【文章】

貞信公

時平公の御舎弟にて忠直聡明

の人なりければ日を追って極官に

登庸したまひ勢ひかたを並ぶる者

なしある夜南殿の御帳の辺りを

過ぎたまふにあやしの鬼と現れ出

太刀のをむんずと取るを刀を抜て

切払へば姿は消て失けるとぞ

　墨塘了古筆記

（注）　鐺＝刀剣の鞘の突端部。本文の「いしづき」に同じ。

ア　本文と【文章】ではともに「あやし」という表現を用いて目にした鬼の姿を表しており、【絵】ではとした忠平の描写と対照的に醜悪な鬼の姿が描かれている。

イ　本文では「いとおそろしくおぼえけれど」と忠平が鬼を恐れる様子も描かれているが、【絵】では忠平の勇ましい姿が描かれ、【文章】では忠平の武勇だけが書かれている。

ウ　【絵】は忠平が鬼とする前の状態で、【文章】では実際に鬼を切り払っているが、本文では「御太刀をひき抜きて」とあるものの実際には切り払っていない。

エ　【文章】と【絵】にはともに方角についての記載はないが、本文では鬼が出入りする方角とされる「丑寅」の方に鬼が退出したと書かれている。

〔　　　〕

【解答】

問一　宣旨（勅宣）／南殿／鬼／手

問二　㋐＝参上する　㋑＝退出する〈４点×２〉

問三　ⓐ＝尊敬・連用形　ⓑ＝打消意志・終止形〈３点×２〉

問四　⑴〈１点〉

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| ず | |  |
| ざら | （ず） | 未然形 |
| ざり | ず | 連用形 |
| ○ | ず | 終止形 |
| ざる | ぬ | 連体形 |
| ざれ | ね | 已然形 |
| ざれ | ○ | 命令形 |
| 未然形 | | 接続 |

⑵　１＝反実仮想　２＝使役　３＝使役〈１点×３〉

問五　鬼につかまれたことによる恐怖を見せまいと我慢する様子。（27字）〈10点〉

問六　ウ〈７点〉

問七　イ〈３点〉

問八　ア〈６点〉

問九　ア〈６点〉

【現代語訳】

この殿〔＝藤原忠平〕が、宣旨をお受け申し上げなさって、（そのことを）執り行うために陣の座の方へいらっしゃる通路を（通って）、紫宸殿の御座所のうしろのあたりをお通りになるときに、何者かの気配がして、（その者が）御太刀の石突きをつかまえたので、（忠平は）たいそう奇妙に思ってお探りになると、毛は気味が悪いほど生えている手で、爪は長く刀の刃のような手なので、鬼であったよと、たいそう恐ろしく思われたが、（忠平は）怖じ気づいたさまを見せまい、と我慢なさって、「天皇の勅命をお受けして、（その）公事の評定（のため）に参上する者をつかまえるとは何者だ。（その手を）放さないならば、（お前にとって）きっと不都合なことになるだろう」と言って、御太刀を引き抜いて、その者の手をおつかまえになったところ、（鬼は）うろたえて（その手を）放して、（鬼門である）北東の遠くの方へ退出してしまった。

【文章】現代語訳

貞信公

藤原時平公の弟で忠義に厚く、聡明な人であったので、日を追うごとに最高の官位に登用されなさり、その他を圧倒する力は肩を並べる者がいない。ある夜、（宮中の）南殿の御座所のあたりを通りなさった際、妙な鬼が突然現れ、太刀の鐺をむんずとつかんだ。（しかし忠平公が）太刀を抜いて（鬼を）切り払ったところ、その姿は消え失せてしまったという。

墨塘了古（隅田了古）筆記

【補充問題】（＊行数は本書に対応）

問１　「かれが手をとらへさせたまへりければ」（６行目）を、主語と「かれ」が指す内容とを明らかにして、現代語訳せよ。

問２　「鬼なりけり」（４行目）と判断した根拠を、本文中から三十字以内で探し、最初と最後の五字を答えよ。

【補充問題解答】

問１　（藤原）忠平（様）が、鬼の手をおつかまえになったところ

問２　毛はむくむ　～　のやうなる［やうなるに］